

(473)

Ni 基超耐熱合金の浸炭による引張延性の低下挙動

金林技術

田辺龍彦・森藤文雄

坂井義和・中沢静夫

I. 緒言

高温ガス炉中間熱交換器は $850^{\circ}\text{C} \sim 1000^{\circ}\text{C}$ の浸炭性ヘリウム雰囲気中で長期間使用されることが予想されていながら、その際に浸炭による延性低下が懸念される。そこで本研究では高温ガス炉中間熱交換器の候補材である Ni 基超耐熱合金について加速浸炭をさせ、差温引張延性の低下挙動を調べて結果を報告する。尚比較のために、浸炭による延性低下の少ない Ni-16 Fe-15 W のデータ⁽¹⁾を引用した。

II. 実験方法

供試材はインコネル 617 (C量: 700 ppm) および Ni-26 Cr-17W-B-Zr (C量: 500 ppm) である。これらは溶体化処理材から引張試験片を切り出し、He+0.1% CH₄ 中、950℃で50 h から最長 1000 h まで加熱保持した。又時効による延性低下を調べるために引張試験片を石英管中に Ar 封入し、加熱炉で 950°C 、1000 h 保持した。差温引張試験はインストロンタイプの試験機を用いた。Ni-16 Fe-15 W 合金については同様組成の合金を製造し、大気中 1000°C のクリープ破断試験を行なった。

III. 実験結果

(1) 溶体化処理材の破断伸びはいずれも 60 ~ 80% 程度の高い値を示すが、1000 h 時効により 35% 程度まで低下する。浸炭材では加熱時間が短いにも関わらず、延性低下が急で、特にインコネル 617 の炭素含有量が 2000 ppm 以下で破断伸びがほぼ零となる。一方 Ni-Cr-W 合金では 300 ppm の炭素量でも若干の延性が残る。Fig. 1)

(2) Ni-Fe-W 合金では浸炭による延性低下は著しくないが、 1000°C 大気中のクリープ破断寿命は Ni-Cr-W 合金に比べると著しく短い。(Table 1)

(3) 浸炭材の電解抽出残渣の X 線回折結果から、インコネル 617 では M_{23}C_6 と M_6C 、Ni-Cr-W 合金では M_6C と M_{23}C_6 が析出物として同定されたが、炭素量の増加により前者では M_6C が、又後者では M_{23}C_6 の増加していることを判斷された。(Table 2)。Ni-Fe-W 合金では W の粒内析出のみである⁽¹⁾ および金属組織観察からインコネル 617 の浸炭による延性低下の著しい原因是 Ennis 等が指摘した如く M_6C の多量に粒界に析出するにあると考えられる。

参考文献 (1) P.J. Ennis et.al : Nucl. Tech. 66 (1984) p. 363

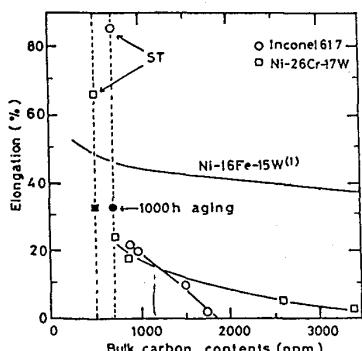


Fig. 1 Decrease of tensile elongation due to carburization

TABLE 1. RUPTURE LIFE OF NI-Fe-W ALLOY AT 1000°C IN AIR

STRESS (KGF/MM ²)	LIFE (H)	
	NI-Fe-W	NI-Cr-W
4	18	927
3	45	-10000

TABLE 2. CHANGE IN RELATIVE X-RAY INTENSITY RATIO (R) OF PRECIPITATES AFTER EXPOSURE IN He-0.1% CH₄ AT 950°C

ANNEALING TIME (H)	R	
	1402 $I_{\text{M}_{23}\text{C}_6}$	INCO.617 $I_{\text{M}_6\text{C}}$
50	0.14	0.48
500	0.83	0.81